

2 十五年戦争と日本外科学会総会

蒔 昭 三

一、研究の目的と方法

「十五年戦争」は国民の医療や医学界にも多大な歪みを与えたが、その一連の負の歪みを分析するとともに、医学・医療界がどのように戦争政策に組み込まれていったかを明らかにすることは今日きわめて重要である。

今回は十五年戦争の期間の日本外科学会総会の記録を分析し、総会がどのように戦争政策に組み込まれ、研究発表がどのように影響をうけていったかを明らかにすることを目的とする。

二、十五年戦争中の日本外科学会総会概略

日本外科学会の第一回総会は一八九九年(明治三二)に開催されている。その後年一回総会が開催され、第一〇回総会は二〇〇〇年(平成一二)に開催された。十五年戦争中の日本外科学会総会の概略は表(学会会場で当日配

布予定)の如くである。

三、考察と結論

一九三三年の三四回総会から「満州事変」等の戦場での外科的症例が軍服を着て軍刀を腰にした軍人により直接外科学会に報告され始め、その後も同様の発表が続き、次第に学会参加者及び学会そのものが「戦傷」や「戦争」を異質と感ぜない状況が生み出されている。

その後アジア全域への侵略戦争の進展にともない、一九三八年(昭和一三)の三九回総会では戦場での失血救急、創傷療法、患肢切断法、毒ガス対策、国産包帯材料の補給等の研究が軍の要望として外科学会に要請され、次第に軍学共同研究、発表が進行している。

日本外科学会が十五年戦争に積極的に荷担してゆく過程では、三九回総会の評議員会での鳥潟隆三会長の問題提起と軍部代表の評議員会への参加決定は、決定的な意義をもっているようである。評議員会への軍部代表の参加は鳥潟隆三会長の発議となっており、この時期に「国家総動員法」が公布された時期であり、軍部代表の参加は軍部自身からの要請によるものであり、評議員会

としてそれを拒否できるような状況ではなかったたのであろう。宿題報告の選定も評議員会で様々に論議されているが、決定は「中央に伝達してそれを軍の命令とでも言う様な形式で二次的に纏まる様にした方」がよいとされた。

一九四一年(昭和一六)の四二回総会の評議員会は、北京大学名誉教授永井潜及び東亜文化協会森島庫太の推薦で、「日支提携という国策の見地から」北京大学外科教授劉氏を次期総会に招待することを決定している。この段階では当時の国策であった大東亜共栄圏的発想に学会そのものが積極的に参加しはじめたとみてよいようである。

一九四〇年(昭和一五)第四一回では退会会員が三三名と発表されている。それは「召集の際外科学会の方に届出をなさらないため」と発表されているように、上述のような学会としての戦争協力の一方、多くの外科医が戦争に召集されて、研究自体も困難になりつつあったようである。

また、一九四一年の四二回からは紙の不足で抄録の発

行が遅れはじめ、さらに紙不足を理由に雑誌投稿論文の字数が制限され、同時に国民的自覚を重視する立場から欧文抄録は付さないことを決定している。そして遂に一九四四年(昭和一九)にはアメリカ軍の爆撃で会場開催が不可能であるとされて年次総会が休会となった。外科学会総会史上二回目である。

以上は戦争の日本外科学会への直接の影響であるが、この間の特筆すべき研究発表に心臓外科と胸部外科に関する発表があった点は特筆すべきであろう。

しかし同時に第三九回の宿題報告「急性肺虚脱」は当時新進気鋭の外科医・石山福二郎であったが、彼が一九四五年五〜六月の「九大生体解剖事件」の執刀者となったことは、医学・医療研究のあり方に問題提起をしているようである。

(城北病院)